

平成 27 年度購入文化財一覧【京都国立博物館】（計 18 件）

- 1 ○種 別 〈絵画〉  
 ○名 称 池大雅像（いけのたいがぞう）  
 ○作 者 等 福原五岳（ふくはらごがく）筆  
 ○時 代 江戸時代（18 世紀）  
 ○品 質 絹本着色  
 ○員 数 1 幅  
 ○寸 法 等 縦 88.0cm、横 29.1 cm  
 ○作品概要 池大雅の肖像画は数本が現存しているが、大雅の弟子・福原五岳（1730～99）の筆になる本作はそれらの中でも最も優れた出来映えを示す一点として知られている。画面上部には大雅風の書で像主の略伝が記され、本作が遺像であることが分かる。片膝をついてその上に両手をのせ、やや前かがみの姿勢をとる表情は憂いを含み、病床の姿を写したものととも考えられている。精緻な面貌描写は、生前の像主の姿を彷彿とさせて見事である。  
 ○購入金額 3,500,000 円



（池大雅像）

- 2 ○種 別 〈絵画〉  
 ○名 称 花見遊楽図屏風（はなみゆうらくずびょうぶ）  
 ○作 者 等 狩野養信（かのうおさのぶ）筆  
 ○時 代 江戸時代（19 世紀）  
 ○品 質 絹本着色  
 ○員 数 2 曲 1 隻  
 ○寸 法 等 縦 137.6cm、横 147.8 cm  
 ○作品概要 江戸・御殿山付近から品川沖を俯瞰的にとらえた作品である。画面下部の近景には桜が咲き誇り、幔幕が張られたなかで人々が思い思いに花見を楽しんでいる。船が多数停泊する品川沖を中心に、これを囲むように東海道と思われる街道が伸び、漁の様子や活発な往来も細緻に描かれる。富士山は群青の塗り残しによってあらわされており、峰には金泥の霞がかかるといういかにも江戸好みの洗練された趣である。破綻のない見事な遠近表現には西洋絵画等からの影響も看取され、その中に名所絵・四季絵・風俗画といった諸要素を含む点でも注目すべき作品である。  
 ○購入金額 3,240,000 円



（花見遊楽図屏風）

- 3 ○種 別 〈絵画〉  
 ○名 称 四季山水図屏風（しきさんすいずびょうぶ）  
 ○作 者 等 久隅守景（くすみもりかげ）筆  
 ○時 代 江戸時代（17 世紀）  
 ○品 質 紙本墨画淡彩  
 ○員 数 6 曲 1 双  
 ○寸 法 等 各縦 149.9cm、横 345.8 cm  
 ○作品概要 季節を示す景物は明瞭ではないが、雨中の柳や雪山の描写から四季山水図を構成していると考えられる。左右隻で視点を異にする点も含め、狩野探幽筆「山水図屏風」（東京国立博物館）との親近性が顕著である一方、景物の重層的な配置により空間に奥行きを与える表現は雪舟画にならうものである。探幽門下の有力弟子としてその大きな影響を受けつつ、さらにおそらくは直接的に雪舟画をも摂取して、自己の様式を確立していったことが見て取れる初期の大作としての価値は高い。  
 ○購入金額 51,840,000 円



(四季山水図屏風)

- 4 ○種 別 〈絵画〉  
 ○名 称 四季花鳥図屏風(しきかちょうずびょうぶ)  
 ○作 者 等 源琦(げんき)筆  
 ○時 代 江戸時代(18世紀)  
 ○品 質 紙本着色  
 ○員 数 6曲1双  
 ○寸 法 等 各縦156.8cm×横356.8cm  
 ○作品概要 右隻には梅・薔薇・山吹と雉・鷺、左隻には芙蓉・寒菊・椿と四十雀・鴛鴦といったモチーフが配され、一双を通じて四季を巡らせる四季花鳥図である。応挙譲りの緻密で華麗な鳥たちの描写と、控えめの優しい彩色による草花の描写が大きな見どころとなっている。梅樹の描写は寛政7年(1795)作の大乗寺障壁面に類似し、近い制作時期を想定することも可能であろう。色感には吉村孝敬筆「十二ヶ月花鳥図屏風」(奈良県立美術館)にも通じ、応挙以降の円山派の流れを考えるうえでもこうした大作は注目される。
- 購入金額 8,000,000円



(四季花鳥図屏風)

- 5 ○種 別 〈書跡〉  
 ○名 称 漢書楊雄伝第五十七(かんじょようゆうでんだいごじゅうなな)  
 ○指 定 国宝  
 ○時 代 中国・唐時代(7世紀)  
 ○品 質 紙本墨書  
 ○員 数 1巻  
 ○寸 法 等 縦27.5cm、全長1385.4cm  
 ○作品概要 尾題に「楊雄伝第五十七」とあること、および本文の内容から、後漢の班固が著し、唐の訓詁学者として著名な顔師古(581~645)が注をほどこした『漢書』楊雄伝の写本である。楊雄(字は子雲、前53~後18)は前漢の文学者・哲学者・言語学者で、王音に文才を認められ朝廷に仕えた。『四庫全書』所収の同本と比較すると、巻頭より2紙分、39行程度が欠けていると思われるものの、全体では26紙分が残存する。歐陽詢風の字高のたかく力強い線の字すがた、あるいは唐の高祖(李淵)や太宗(李世民)の「淵」や「民」に諱を避けるための欠筆が存在することから、書写年代は唐時代の7世紀にまでさかのぼるとみてよい。巻末の加點奥書が示すように、文中の随所には、数度にわたり訓点が付されている。
- 購入金額 310,000,000円



(漢書楊雄伝第五十七) 写真は部分

- 6 ○種 別 〈書跡〉  
 ○名 称 正親町天皇宸翰御消息 蘭奢待云々 九条種通宛(おおぎまきてんのうしんかんおんしょうそく らんじゃたいいうぬん くじょうたねみちあて)  
 ○指 定 重要文化財  
 ○時 代 桃山時代(16世紀)  
 ○品 質 紙本墨書  
 ○員 数 1幅  
 ○寸 法 等 縦34.7cm、横99.9cm  
 ○作品概要 ウハ書に据えられた花押は、「正親町天皇宸翰御消息」(重要文化財、大雲院蔵)と比較しても同一であり、散らし書きの体裁をとる確実な正親町天皇の宸筆である。内容は天正2年(1574)3月、東大寺三倉に収められた名香「蘭奢待」の小片を下賜するにあたり、九条種通(1507~94)にあてたもの。蘭奢待はベトナム付近を産出地とする沈香で、そのなかに「東大寺」の三文字を隠しもつ。三倉の開封には古来、厳重な儀式を必要としたが、『天正二年截香記』によれば、奏請から間もない3月28日、蘭奢待は織田信長の待ちうける多聞山城に運び出されたのち、二片が切りとられ、一片は信長が手許にとどめ、もう一片は正親町天皇に献上された。強引ともいえる信長の要請に応じざるを得なかった天皇の無念が滲む一方、決して揺らぐことのない字すがたは天皇の高い徳を示すものといえる。
- 購入金額 50,000,000円



(正親町天皇宸翰御消息 蘭奢待云々 九条種通宛)

- 7 ○種 別 〈書跡〉  
 ○名 称 寸松庵色紙（ちはやふる）（すんしょうあんしきし（ちはやふる））  
 ○指 定 重要文化財  
 ○時 代 平安時代（11世紀）  
 ○品 質 彩箋墨書  
 ○員 数 1幅  
 ○寸 法 等 縦12.7cm、横12.2cm  
 ○作品概要 「寸松庵色紙」は、伝小野道風筆の「継色紙」と伝藤原行成筆の「升色紙」とともに、三色紙とよばれる古筆の名品で、紀貫之（872～945?）を伝称筆者とする。大徳寺龍光院の子院である寸松庵に住した茶人・佐久間真勝（あるいは直勝とも、1570～1642）が愛蔵したことから、その名がある。40枚程度が確認されるなかで、草花文様が鮮やかに残る唐紙に、『古今和歌集』巻第5・294番歌＝在原業平の有名な「ちはやふる…」一首を散らし書にする。自然でありながら品格あふれる筆跡は、優美な料紙とみごとに調和し、狭い紙面に上句と下句を巧みに配列することで、余白の広さを効果的に生み出すなど、もはや総合芸術といっても過言ではない。
- 購入金額 80,000,000円



（寸松庵色紙（ちはやふる））

- 8 ○種 別 〈金工〉  
 ○名 称 太刀 銘備中国住人左兵衛尉直次作／建武二年十一月（たちめいびつちゅうのくにじゅうにんさひょうえのじょうなかつさく／けんむにねんじゅういちがつ）  
 ○指 定 重要文化財  
 ○時 代 鎌倉時代（14世紀）  
 ○品 質 鉄鍛造  
 ○員 数 1対  
 ○寸 法 等 全長91.4cm、刃長70.7cm、茎長20.7cm、鋒長2.9cm、刀身反2.4cm、元幅3.2cm、先幅2.1cm、元重0.7cm、先重0.6cm  
 ○作品概要 本品は使い勝手を良くするため、後年になってわずかに磨上げられてはいるものの、銘文は全文判読可能である。刀身部分の作も非常に良好で、刃中の働きが極めて豊富かつ繊細なうえ、身幅広く、やや重が薄い点に南北朝時代につながる時代的な特徴を見て取ることができる。当館所蔵の青江鍛冶の作品は重要文化財「太刀 銘包次」1件のみであり、備中鍛冶の全体像を見渡すためにも、鎌倉時代最末期・建武二年の年紀がある本品は基準作として極めて重要である。
- 購入金額 30,000,000円



（太刀 銘備中国住人左兵衛尉直次作／建武二年十一月）

- 9 ○種 別 〈金工〉  
 ○名 称 刀 銘越後守藤原国儒（かたな めいえちごのかみふじわらのくにとし）  
 ○時 代 桃山時代（17世紀）  
 ○品 質 鉄、鍛造  
 ○員 数 1口  
 ○寸 法 等 刃長65.7cm 反り2.4cm 目釘孔1個  
 ○作品概要 桃山時代の京都で繁栄した刀工集団堀川派の名工・越後守藤原国儒の打刀。鍛錬の細やかな地鉄に、ゆったりとしたのたれに互の目を交えた刃を焼き、沸がよくつき、砂流しがかり、帽子は浅くのたれて小丸に長く返るなど、末閨風の色彩を色濃くあらわしている。さらに注目すべきは、本品の刀姿である。寸つまりで、先反りのついた体配を示し、茎も片手打風に刀身に比して短く造り込んでいるなど、姿までも室町末期の打刀の形状を忠実に写している。
- 購入金額 12,000,000円



(刀 銘越後守藤原国備)

- 10 ○種 別 <金工>  
 ○名 称 太刀 銘備州長船家守／應永元年十月日(たち めいびしゅうおさふねいえもり／おうえいがんねんじゅうがつじつ)  
 附 牡丹金襴包鞘花唐草文金具毛抜形太刀拵(つげたり ぼたんきんらんつつみさやはなからくさもんかなぐけぬきがたたちごしらえ)  
 ○時 代 【刀身】室町時代(14世紀)、拵】江戸時代(19世紀)  
 ○品 質 【刀身】鉄、鍛造、【拵】木胎、金襴包、銀鍛造  
 ○員 数 1口  
 ○寸 法 等 【刀身】刃長 69.8 cm 反 1.95 cm 目釘孔 1個、【拵】全長 98.3 cm 鞘長 75.0 cm  
 ○作品概要 太刀は身幅がやや研ぎ減っているものの、重が一段と厚く、先方にも反りが付いた堂々とした太刀姿を示しており、室町時代前期の特色を備えている。地鉄に見られるやや肌立った杣目交じりの板目肌は室町時代の備前刀に顕著なもので、淡い映の立つ小互の目・小丁子交じりの刃文とあわせて小反り派の典型作と言える。応永元年の年紀を有することからも基準作として申し分ない。  
 拵は、金具類の彫金技法も極めて洗練されており、みやこの工人の確かな技術が伺える名品と言える。この拵は文久三年に本阿弥家と並ぶ研師の名門、竹屋家が家守の太刀に合わせて製作したもので、製作に当たって関与した各分野の工人の名前を列記した仕様目録が付随する点が極めて重要である。  
 ○購入金額 11,000,000 円



(太刀 銘備州長船家守／應永元年十月日)



(附 牡丹金襴包鞘花唐草文金具毛抜形太刀拵)

- 11 ○種 別 <金工>  
 ○名 称 龍虎図二所物 小柄 銘天保九戌年首冬作後藤法橋一乗(花押)(りゅうこず ふたところもの こづか めいてんぼうきゅういぬどししゅうとうさく ごとうほっきょういちじょう(かおう))  
 筭 銘後藤光代入道法橋一乗(花押)(こうがい めいごとうみつよにゅうどうほっきょういちじょう (かおう))  
 ○時 代 江戸時代(19世紀)  
 ○品 質 赤銅、鍛造、彫金  
 ○員 数 1組  
 ○寸 法 等 【小柄】長 9.7 cm 幅 1.45 cm、【筭】長 21.2 cm 幅 1.2 cm 75.0 cm  
 ○作品概要 この二所物は、表面に極小の魚々子鑿で整然とした魚々子を敷き詰め、そこに虎と龍を描くことで二者をあわせて龍虎のモチーフとしている。黒一色の地に彫り込まれた龍虎の図は極めて細密で、後藤家伝統の図案を一乗が群像風にアレンジしたものである。龍の鱗の一枚、虎の毛並みの一筋に至るまで一切の破綻が無く、一乗の彫物師としての技量の高さがいかに発揮されている。さらに付属する桐箱は一乗自身の手による墨書がなされた共箱であり、天保9年(1838)の年紀もあることから資料性が極めて高い。  
 ○購入金額 6,500,000 円



龍虎図二所物 銘後藤法橋一乗(花押)

- 12 ○種 別 <金工>  
 ○名 称 乙女図小柄 銘後藤法橋一乗(花押)(おとめず こづか めいごとうほっきょういちじょう(かおう))  
 ○時 代 江戸時代(19世紀)  
 ○品 質 赤銅、鍛造、彫金  
 ○員 数 1口  
 ○寸 法 等 長 9.7 cm 幅 1.42 cm  
 ○作品概要 赤銅を基材として、裏に金板を接合し、表面にオカメ顔の女性像を高肉に彫出す。着物や瓢に素銅や金・銀などの色彩豊かな金属を象嵌することでモチーフを引き立てる色絵技法がふんだんに盛り込まれた華やかな作品である。さらに付属する桐箱は一乗自身の手による墨書がなされた共箱であり、資料性が極めて高い。  
 ○購入金額 2,700,000 円



乙女図小柄 銘後藤法橋一乗（花押）

- 13 ○種 別 〈陶磁〉  
○指 定 重要文化財  
○名 称 銚絵寒山拾得図角皿（さびえかんざんじつとくずかくざら）  
○作 者 等 尾形光琳（おがたこうりん）・乾山（けんざん）合作  
○時 代 江戸時代（18世紀）  
○品 質 軟質陶胎  
○員 数 1対  
○寸 法 等 (cm) 寒山図 高 3.2、幅 21.8×21.9、底径 21.2×20.9、  
拾得図 高 3.1、幅 21.8×22.0、底径 21.0×21.1  
○作品概要 型作り成形された正四方の一対の角皿である。縁は切立縁で、底部の周縁を面取りに仕上げている。総体に白泥による白化粧をし、マンガンの鉄絵具で人物や賛を表して朱で印を捺し、その上に透明釉を施している。二枚ともに見込周縁を界線で囲んで、中ほどに人物図を描き、その左右に賛や銘文、落款を捺している。  
○購入金額 190,000,000円



（銚絵寒山拾得図角皿）

- 14 ○種 別 〈陶磁〉  
○名 称 灰陶加彩辟邪形器座（はいとうかさいへきぎやがたきざ）  
○時 代 中国・漢代（紀元前1～3世紀）  
○品 質 土器  
○員 数 1基  
○寸 法 等 高 12.2cm、幅 20.3cm×12.1cm  
○作品概要 本作は中国・漢代の俑である。顔先が短く、虎のような顔をした獅子形の俑で、とぐろを巻いてうずくまるような姿をしており、肩には羽根を閉じたような表現がなされていることから、辟邪を表現したものと思われる。胴部には、へら彫り毛並みが表され、その上から朱色の彩色が施されている。底はなく、内部は中空となっており、中央に穴があげられている。旗を指すものとして用いられたり、四神のように四方に配して、構造物の台座の一部として用いられたり、いくつかの用途が考えられる。  
○購入金額 2,900,000円



（灰陶加彩辟邪形器座）

- 15 ○種 別 〈陶磁〉  
○名 称 色絵栄花物語冊子形硯箱（いろえいがものがたりさっしがたすずりばこ）  
○時 代 江戸時代（18～19世紀）  
○品 質 施釉陶器  
○員 数 1口  
○寸 法 等 高 9.6cm、幅 22.5cm×15.4cm  
○作品概要 『栄花物語』の和装本を積み上げた状態をかたどった硯箱である。冊子を七冊重ねた状態で、一冊づつの厚さも異なるなど、細部へのこだわりもみえる。白釉の地に「栄花物語 御賀」と銚絵で記し、紗綾文地を紺の絵具、菊花を赤、緑の絵具と金彩で描いている。一般に古清水と総称される色絵陶器の一群である。ただし、極端に色挿しをして盛り上げてはいない。また、蓋上の菊文の部分には透かし彫りがみられる。印や銘などはみられない。京都では江戸時代以降、いわゆる京焼という一大窯業地として、多くのやきものが作られてきており、本作もその流れを語る上でも欠かすことができないものである。  
○購入金額 7,560,000円



(色絵栄花物語冊子形硯箱)

- 16 ○種 別 〈陶磁〉  
 ○名 称 色絵三番叟香炉 (いろえさんばそうこうろ)  
 ○時 代 江戸時代(19世紀)  
 ○品 質 施釉陶器  
 ○員 数 1基  
 ○寸 法 等 総高 31.2cm  
 ○作品概要 能の演目である「式三番」の後半に演じる舞である「三番叟」をあらわした色絵の香炉である。直面でおどけた表情をみせる。頭部と背中の中香を入れる部分が外せることができ、口と鼻が煙出しとなっている。衣装は、亀甲文、青海波文の地紋に松竹と鶴、宝相華文が描かれている。青色、緑色の絵具を基調とし、縁取りに金彩を用い、上絵付けは厚く塗られている。顔と手、底部については無釉で、眉や目、口、そして烏帽子紐には色付けがされている。  
 ○購入金額 2,350,000円



(色絵三番叟香炉)

- 17 ○種 別 〈漆工〉  
 ○名 称 桐竹鳳凰菊桐紋蒔絵広蓋 (きりたけほうおうききりもんまきえひろふた)  
 ○時 代 桃山時代(16~17世紀)  
 ○品 質 木製、漆塗、蒔絵、金銅製縁  
 ○員 数 1枚  
 ○寸 法 等 54.0cm×56.9cm 高 9.2cm  
 ○作品概要 本品は、全体を梨地とし、見込みから内側面にかけて、金薄肉高蒔絵、金平蒔絵、金付描、金銀の金具、金銀の切金を組み合わせた本格的な蒔絵技法で、土坡に桐竹、岩、雲、下草類、そして鳳凰の番いを表した、きわめて豪華な品である。外側面と底裏には金平蒔絵、金銀金具、金付描で、菊桐紋を並べ置いている。底裏にも文様があるのは、そこが衣装箱の蓋表であったときの名残ととらえられ、この盆が広蓋の初期例であることを示唆している。さらにいえば、本来は王者のみに許される文様であった桐竹鳳凰という文様や、菊桐紋の組み合わせ、蒔絵の質の高さなどを考え合わせると、豊臣家周辺で作られた品であるとも想定できる。家紋を置く装飾法も含め、のちに定型化する婚礼調度としての広蓋の源流に位置づけられる品といえることができる。  
 ○購入金額 10,000,000円



(桐竹鳳凰菊桐紋蒔絵広蓋)

- 18 ○種 別 〈染織〉  
 ○名 称 紅文綾地菱亀甲文様総鹿子絞小袖 (べにもんあやじひしきこうもんようそうがのこしほりぬいこそで)  
 ○時 代 江戸時代(17世紀)  
 ○品 質 絹  
 ○員 数 1領  
 ○寸 法 等 丈 147.0cm、衿 61.0cm、袖丈 41.5cm  
 ○作品概要 粒状の鹿の子絞りを全体に連ね、絞り残した部分で小ぶりの亀甲と菱の輪郭線を表現した、総鹿の子絞りの小袖である。このように、地落ちで文様を表現した総鹿の子絞りの小袖は、一般的には、江戸時代後期に町方の女性が晴着として着用した作例が多いが、この1領は、それらよりも明らかに製作年代が遡る要素を含むことから、本小袖の製作年代は、17世紀後半の寛文期周辺と考える。仕立て直しの痕跡は認められるものの、17世紀半ば頃の欠失部分のない小袖が市場に出回ることは極めて稀である。  
 ○購入金額 16,200,000円



(紅文綾地菱亀甲文様総鹿子紋繡小袖)